#アンプde GO!! with Marshall season2

第6回

“アンプでギターを鳴らす大切さ”を読者のみんなに伝えるべく始動した『#アンプ de GO!!』。そのシーズン2の第6回目は、『BanG Dream!』から誕生したボーイズ・バンド：Argonavisのギタリストとして活躍する日向大輔が登場！ 彼がマーシャル・アンプに抱く思いや、現在ライブで愛用し続けているモデル、そして実際に音を鳴らす際のセッティング法とは？ そのこだわりについて大いに語ってもらうことにしよう。

製品のお問合わせ先／ヤマハミュージックジャパン [http://www.marshallamps.jp]

日向大輔
[Argonavis]

――初めてアンプで爆音のギター・サウンドを鳴らしたとき、どんな気持ちでしたか？

日向：音の大きさと圧倒的なパワーに衝撃を受けました。ギターを鳴らした瞬間、スピーカーから生み出される音の振動が体全体に響いて、感じたことのない心地好さに浸り、まるでギター・ヒーローになった気分でした。当時は設定に関する知識もなく、ザクザク感満載の歪みサウンドが全身を切り刻んでいるような感覚でただ鳴らすことだけでも楽しく、恥ずかしいことにハウリングですらカッコ良く聴こえてましたね。弾き終わった後、耳の中で余韻がずっと残っていたのを今でも覚えています。

――マーシャルというブランドに対するイメージは？

日向：多くのギタリストが支持しており、あらゆるスタジオやライブ会場で活躍する必要不可欠な名機。初めてバンドを組んでギターを弾く場合、まずマーシャルを使う方が多いんじゃないでしょうか？ 僕はそうでした（笑）。ギター・ボーイの憧れでしたね。エフェクターなしでもロックなサウンドを鳴らすことができ、音楽の歴史に多大な影響をおよぼした王道アンプという印象です。

――マーシャル・アンプに初めて触れたのいつ頃でしたか？

日向：20歳くらいの頃、音楽仲間と下北沢のスタジオに入ったときです。学生の頃、地元にはスタジオがなくて、本格的なアンプで音を鳴らした経験もなかったので、テレビや雑誌で見るようなアンプがスタジオに置いてある…そんな空間にまず感動しました。そして憧れだったマーシャルのアンプを背にし、ギターを構える自分の姿を鏡で見たときに、“いつか必ずプロのミュージシャンになる”という気持ちになりました。夢を膨らませてくれたきっかけの1つでもあります。

Marshall JCM 2000 & 1960 LEAD Cabinet

◀▼「自分の頭の中でイメージしているサウンドを忠実に再現できて、Argonavisのサウンドを一緒に生み出してくれる相棒だと思っています」と、日向が絶対的な信頼を寄せている愛機=JCM 2000。

「基本の設定は、GAIN=2／VOLUME=3。歪み自体は足下で作っているので、音の抜けや輪郭が際立つようにTREBLEは高めに。PRESENCEは逆にほぼカットしてます。また、レスポール特有の音の太さを活かしてMIDDLEはセンター（=5）。ベースとドラムの帯域に被らないようにLOWは3辺りで抑え目にしてます。

一番こだわってるのはエアー感です。ゲネの段階からPAさんと入念に音作りをしており、生で聴いたときとイヤモニをしたときの環境をなるべく近付けるように意識しています。あと、ボーカルが歌いやすい環境作りも大事にしています。バンド全体のバランスを考えつつ、ライブ会場や他の楽器の帯域と被らないように微調整しているんです」（日向）

Argonavis 1st Full Album『Starry Line』

ブシロードミュージック
【通常盤】BRMM-10287
【Blu-ray付生産限定盤】BRMM-10286

Now On Sale!!!

『BanG Dream!』から生まれたボーイズ・バンド・プロジェクト『ARGONAVIS from BanG Dream!』。そして、同プロジェクトを始動当初から牽引してきたのがArgonavisだ。そんな彼らの記念すべき1stフル・アルバム『Starry Line』が2020年8月12日に発売された。本作はTVアニメ『アルゴナビス from BanG Dream!』の主題歌等を含む楽曲の多彩さや、約2年間で磨き上げられてきた屈強なバンド力も収められた、まさに集大成と言える1枚。GiGS11月号では同作について伊藤／日向／前田に語ってもらったが、さらにこのページを熟読した上で彼らのライブを観れば、必ずや今までと違う感覚が掴めるだろう。